
富山大学 教育学部

附属教育実践研究指導センターニュース

第 13 号

CENTER NEWS
CENTER FOR RESEARCH AND TRAINING IN TEACHER EDUCATION
FACULTY OF EDUCATION, TOYAMA UNIVERSITY



映像プレゼンテーション制作実習での作品

目 次	
1. センター長退任の挨拶に代えて……………	前センター長 長井真隆…………… 2
2. 東南アジア諸国に対する科学技術教育の 国際貢献, 技術協力の在り方, 進め方……………	センター長 山極 隆…………… 3
3. 教育実習にみる教員としての資質の養成と限界……………	附属中学校 蟹谷茂昭…………… 5
4. 情報が支える海外生活 一タイでの技術移転の経験から……………	センター 吉田雅巳…………… 6
5. 「教師を目指すひとのためのコンピュータ講習会」報告……………	センター 吉田雅巳…………… 8
6. 公開講座「教師のためのマルチメディア」……………	情報教育 山西潤一…………… 9
7. 富山県教育工学研究会 特別セミナー開催……………	情報教育 山西潤一…………… 10
8. センターの歩み……………	…………… 11

1995年 4 月
富山大学教育学部附属教育実践研究指導センター

センター長退任の挨拶に代えて

前センター長 長 井 真 隆

教職員免許法の改正によって教育実習の事前及び事後指導は制度化された。本学部では事前指導は実習直前に集中的集団的に行い、事後指導はレポートに基づく指導教官の個別指導に委ねられている。近年、教員の新規採用が非常にきびしくなり、教員の養成・採用・研修という教師教育の一貫性や整合性が問われる中で、教育実習の事前・事後指導のあり方についても、現実的な検討が望まれる。

ところでレポートの内容は、実習体験に基づく教材研究、児童生徒観、指導法、教育観など多岐にわたるが、昨年、小学校で実習した3年次のある学生の例では、教師としての自己の資質について述べている。「暴力的な態度、乱暴な言葉でしか、私とかかわりの持てなかった子がいた。そんなふうであるから、クラス内においても、みんなとうまく接することができない。その態度や言動の背後にあるものを読み取ってあげられず、はがゆい思いがした。また、ある女の子から、ちょっとしたことでけんかになり、しばらく泣きつづけたが、いったいどんな言葉をかけていいのかわからず、そんな自分にイライラするだけだった。」と、自分の未熟さ、無力さを思い知り、「子供と共感できる教師、その子にとって、今、どんな声かけや対応が一番なのかを考え行動できる教師」でありたいと願い、そのためには「子供とともに驚いたり感動したりできる感性」を磨く必要があると結論づけている。そして文部省教科調査官遠藤友麗先生の文章を引用し、感性を「美しさやよさ、快さ、神秘、畏れ、人情、愛情など、価値や意味を感じ取る心の感受性」、一言でいえば「心に感じて思う力」であると、感性を磨くには、「五感と心の目をはたらかせ、自然を深く観察したり、豊かな芸術や人の心配りに触れたりすることが基盤である。」と認識している。

実習が終わってから、極力、美しいもの、本物や人情に触れる場を探し求めて歩いている。ある農家で鶏の集卵に出会った。「生みたての卵は温かくてツヤツヤとして輝いていた。普段見る卵と同じ大きさのものばかりではなく、中にはゴルフボールくらいの大きさしかないものや、殻が不完全で軟らかいものもあった。このことは私にとって大変衝撃的なことだった。なぜなら、今までスーパーに並べている、ケースの中に10個ずつ入った同じ大きさの卵しか見たことがなく、卵を商品としてしかとらえていなかったからだ。卵が自分の口に入るまでの過程や、卵にかかわる人や自然に一切目を向けることなく生きていた自分が見えたのである。人間は自然とつながり合って生きている。鶏は生きている。鶏は卵を産む機械ではないことを実感した。生きているからこそ、いろいろな卵を産むのだと。そして自然に触れることによって、人間の心が耕されていくことがはっきりした。」とためらうことなく述べている。

レポートを読み終えて、この学生と幾度も話し合いの機会を持った。この学生はこうした自然体験を大切に、これを卒業研究で深めたいと強く主張した。即座に同意はしなかったが、この学生が指摘した卵の温もりや輝き、軟殻卵などは、私にとっても戦後鶏を飼っていたとき以来すっかり忘れていたことだ。それほど今日の生活は、便利さ故に自然から遠のいているのである。今、この学生は感性と自然体験について、県内の自然史系博物館の協力を得て、自ら自然教室に参加して、体験したことや参加者のアンケートをもとに研究を深め、教職志望を最優先にして進路選択の決意を新たにしていく。

レポートを読んで感ずることは、この学生のように実習体験をとおして教職志望を一層強固にする学生が多いことである。しかしながら現実には多様な進路選択を余儀なくされる。教育実習には本来の教師養成という積極的な意味があり、それを踏まえた上で多様化する進路選択への対応を理論的実践的に検討する必要があるが、いずれにしても個々の学生の実態に即したきめ細かな指導を痛感する。

東南アジア諸国に対する科学技術教育の 国際貢献，技術協力の在り方，進め方

教育学部附属教育実践研究指導センター長 山 極 隆

現在、フィリピン、マレーシア、インドネシアなど、主として東南アジア諸国に対して、組織的、計画的、継続的に科学技術教育の分野における技術協力を行っているが、今後、他の国々に対して技術協力をする場合、どのような観点に立ち、また、どのような過程を経て行ったらよいかについて、主としてフィリピンに対する科学技術教育分野の協力を参考に述べてみたい。なお、ここで用いる資料としては、国際開発高等教育機構が作成した国際貢献の方法、そして筆者が最初から関与しているフィリピン理数科教師訓練センタープロジェクトに関する報告書などを参考にする。国際開発高等教育機構が作成した国際貢献の方法も、実際は、フィリピン理数科教師訓練センタープロジェクトを参考に作られたものである。

我が国の科学技術教育分野で技術協力する場合、一般的な方法としては外務省、国際協力事業団（JICA）を通して行うプロジェクトがある。そのうち、学術、教育分野等においては、文部省も深くかかわることになる。では、どのような過程で技術協力が行われることが望ましいか。次の5項目を基本に据える必要がある。

- 1 その国の初等中等教育改革の必要性
- 2 日本に対する援助の要請
- 3 その国の科学技術教育の現状と問題点
- 4 具体的な学校の状況
- 5 プロジェクト策定の条件

1 その国の初等中等教育改革の必要性

この項目については、各国で事情が異なると思われるが、一般的には、民主化の高まりを迎えるなかで教育を受ける機会を増やし、良質の労働力を確保して経済活動を活発にするために、学校教育制度の改革をはじめ、校舎、設備の充実、教師の再訓練等、初等中等教育の根本的な整備が必要になる。また、初等中等教育の質を向上させ、均等な教育の機会を増やすために、初等中等教育開発プログラム（Primary, Secondary Education Development Program）を開始する。

共通に考えられる開発プログラムの目的とプログラムの構成要素は次の通りである。

目的：

- (1)初等中等教育の質的改善
- (2)初等中等教育制度の内部効率の改善
- (3)初等中等教育の機会の拡大
- (4)教育資源の公平な分配

プログラムの構成要素

- (1)カリキュラムの開発
- (2)教師の再訓練
- (3)学校施設の改善

2 日本に対する援助の要請

フィリピン国を例にとれば、フィリピン国では低迷を続ける同国経済の再建のために経済の安定と生産性の向上を目指しているが、それらを支える広範な人材の育成、とりわけ有能な科学技術系の人材開発（Man-power Development）が急務となっている。同国政府はかかる認識から、初等中等教育段階における児童生徒の理数科学習能力の向上が重要であり、そのために知識・経験が不十分な理数科教師のレベルアップを図ることが必要であるとして、国立フィリピン大学敷地内に「理数

科教師訓練センター」の設立計画を策定し、同センターの建設について、日本に無償資金協力を要請した。

また、それと併せて、観察、実験機材の供与、理数科教師の再訓練のための我が国からの専門家派遣、カウンターパートの引受けなどの協力の要請があった。

3 その国の科学技術教育の現状と問題点

この項目についても、各国で事情が異なると思われるが、一般的には、次に挙げた4つの事項が掲げられることが多い。

- (1) 科学技術系教員の不足
- (2) 理科教員養成過程の問題
- (3) 改訂されたカリキュラムに関する研修の不足
- (4) 科学技術系に関する教材の不足

このうち、(1)については、人数的な不足に併せて、教員の資質の低下といった問題も多く、専門外の教師によって科学技術系の教科、科目が教えられているなどの問題である。

(2)については、教員養成過程でのカリキュラムや講義内容、程度に問題があり、例えば、教員養成過程のカリキュラムに観察や実験が殆ど含まれていないために、このような教育を受けてきた学校現場の教師たちが、自らの授業に観察、実験を取り入れるのを困難にしているなどの問題である。

(3)については、研修の機会の不足、研修の時間の不足、研修意欲の不足などが上がっている。(4)については、観察、実験教材・教具の数量的な不足とともに、実験技能の低下や設備が揃っていない学校でも、実際に活用されていないなどの問題がある。

4 プロジェクト策定の条件

フィリピン国を例にとれば、「理数科教師訓練センター」設立のための無償資金協力の養成を受けて、我が国は1987年の基本設計調査を経て、理数科教師の再教育に必要な施設・機材を整備し、1990年6月にその引渡しを完了した。

現在まで、我が国は、同センターに対して多くの長期、短期専門家を派遣し、訓練スタッフの育成に努めているが、現在、地方への展開を含め、協力効果をより一層高めることを目指して、プロジェクト方式技術協力を行うことになった。その年次計画は次の表の通りである。

日本の協力によるフィリピン理科教育に関する年表

	昭和57以前 1982以前	昭和58 1983	昭和59 1984	昭和60 1985	昭和61 1986	昭和62 1987	昭和63 1988	平成元 1989	平成2 1990	平成3 1991	平成4 1992	平成5 1993	平成6 1994	平成7 1995	平成8 1996	平成9 1997	平成10 1998		
無償資金協力	約137億円 予備校、専修 小・中学校 教育用図書 (小・中学校 図書+機材)						6-7 基本設計 ①	1-2 基本設計 ②	2-3 基本設計 ③	4 基本設計 ④	10 基本設計 ⑤	11 基本設計 ⑥	11 基本設計 ⑦	11 基本設計 ⑧	11 基本設計 ⑨	11 基本設計 ⑩	11 基本設計 ⑪	11 基本設計 ⑫	
金口力	約12億円 図書、機材 図書、機材 図書、機材 図書、機材							2-3 基本設計 ①	1-2 基本設計 ②	1-2 基本設計 ③	1-2 基本設計 ④								
JOCV	協力員派遣 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	11名 協力員派遣	
派遣員	47.68名 派遣員派遣 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	47.68名 派遣員派遣	
技術協力	プロジェクト 方式技術協力 専門家派遣 専門家派遣																		
企業	パッケージ協力																		
フィリピン情勢	1946.7.4 独立 1947.7 マニラ 政変	6.21 アキノ 政権			2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	2.26 アキノ 政権	

その他無償資金協力で平成2・3年度に初等学校を対象にした水道施設及びトイレ建設を行っている。(約16億円)

教育実習にみる教員としての資質の養成と限界

附属中学校教諭 蟹谷茂昭

教育実習は、実習生にとって初めての現場での教育体験であり、大学で学んだ専門教養、教職教養の知識・理論をもとに、「教えられる」立場から「教える」立場への出発点といえる。また、教育者としての自己の適性を発見し、錬磨するためのまたとない機会ともいえる。

本年度、本校において教育実習を体験したある学生は、次のように感想を述べている。

いったい自分は、大学での講義で何を勉強してきたのだと思うほど自分の知識の足りなさがかっかりきてしまった。授業では、知識や理論を羅列して生徒に伝えることは簡単である。授業とは、「教える」こととばかり考えていたが、実は、「考えさせる」「発見させる」ものであり、生徒に「もっと知りたい」「もっと学びたい」と思わせ、考えるきっかけを教師はつくってやらなければならない。「教えること」は本当に難しい。

本校では、毎年実習生を受け入れるにあたり、6月に約3週間にわたる観察参観を実施し、さらに9月の実習開始前に、実習の留意事項をはじめ、学習指導、学級運営、道徳、特別活動など教育活動全般にわたって事前指導の機会を設けている。また実習期間中も学習指導（教科指導）を中心に、教育に対する心構えや生徒理解の方法や在り方など各教官が実地授業を通して指導している。では、なぜこの実習生にみられるような感想が毎年多くの学生から聞かれるのであろうか。

第一の理由として、生徒の姿が見えてこないことがあげられる。学習指導は、言うまでもなく、学習の指導であって、生徒の学習をより効果的に行われるように助言し、支援する教師の教育的営みである。しかしながら、指導案を立てて、その通りに授業を進めようとするあまり教師の意図した答えしか期待せず、間違った答えは、どのように考えた結果なのかを考えるゆとりがなくなってしまうのである。また、発問をなげかけても、あまりにも簡単であったり、逆に難しすぎたりして、生徒が反応せず、ますます生徒を見失ってしまう。生徒の実態を見きわめ、発問の質を決定し、その応答を予想し、提示する教材やそれに関わる発問を順序づけて準備していく必要がある。

第二の理由として、教材研究の不足があげられる。中学生の学習内容ぐらいという意識が、教材を甘くみ、結論を急ぐあまり、一方的な説明に終わり、具体目標のない、抽象的、表面的な学習に陥ってしまうのである。教材を通して、何がわかればよいのか、何ができるようになればよいのか、どのような見方や考え方ができるようになればよいのかといった具体目標を明確にし、学習過程を構成していかなければならない。

しかしながら、こうしたことは一朝一夕のうちに完成するものではない。日々の教育実践と研究の積み重ねが生徒にとって「わかる授業」を可能にするのであって、わずか2～3週間の教育実習の間に、実習生にどれだけのことが期待できるだろうか。実習生諸君には、この実習で得た貴重な体験、「教えることによって学んだ」ことを糧に、以後の大学生活、さらには、教員となって現場に立つてからも「教えることによって学ぶ」姿勢をもち「教材を見る眼」「生徒を見る眼」を鍛えつづけ、学習指導の在り方を研究してほしい。そして、生徒の立場に立ち、よりよい指導法を自ら見出し出してほしい。さらには、教師も一人の人間である以上、生徒にとって人間としての魅力をも兼ねそなえた教師であってほしい。

情報が支える海外生活

— タイでの技術移転の経験から —

センター専任教官 吉田雅巳

急激な経済成長の波の中で

タイは現在、経済成長中である。その変化の勢いは感覚的には昭和40年代の日本の経済成長を上回る。例えば、私が着任した時には、タイの首都バンコックには、料金メータ無しの旧式車のタクシーが多く、移動の度に値段の交渉が必要であったが、次第にメータ付きの新車のカラークラスのタクシーが増え、数か月後には古い車が一扫されコロナクラスのタクシーが珍しくなくなっていた。月に一度程度の割りで業務連絡の為にバンコックへ行き来していたが、ビルや商店街などの街そのものの様相も含めて、僅かな間の変化に仰天したものである。

物流や経済の成長が急速な反面、それを支えるシステムの整備が遅れるのは仕方のない所で、公共交通の整備など国民が個々に不便を感じ解決を熱望しながらも解決まで時間を要する組織にかかわる問題もある。援助もしかりで、この国で我々がこれから望まれるのは、明らかに物質の供与や技術の指導といった物中心の取り組みでなく、援助内容が彼ら自身の組織にいかにか根づくかを中心に考えてゆく技術協力的な姿勢が必要となるに違いない。

私の今回の派遣でも、最も大切であったのは問題を知らない人々に問題を指摘することではなく、彼らも感ずる問題をいかに協力して解決するかであった。まさに組織に係わる取り組みで、議論と交渉が中心の業務であった。この種の仕事は、何をもって成功と定義することができず、また、全てが丸く収まるものではなく底無の感がある。しかし、個人的には数多くのかけがえのない貴重な経験することができ心底満足のできた一年間であった。

情報処理と専門家

現地の専門家生活で最も重要であったのは、情報であった。これは、決して狭義の情報ではなく生活情報を含む幅広い捉え方である。以下に、かい摘んでご紹介するが、これはむしろこのような断片のご紹介から現地の様子が具体的にご理解いただけると感じたからである。

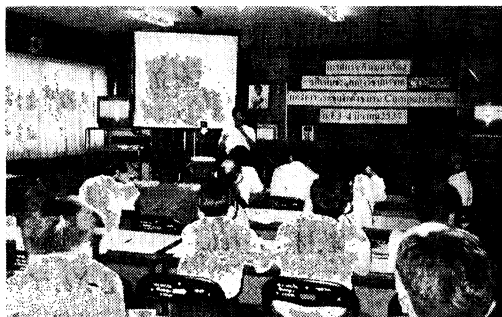
1. ネットワーク

日本を発つ前にタイに TAIPAK というパケット通信網があることを突き止め郵送で申し込んでおいた。

そのおかげで着任当日からパソコン通信が使えた。通常の国際電話回線は極端に質が悪くべらぼうに高価である。また主要な日本の商用 BBS は海外からのダイレクトアクセスを拒否するので、この方法は大変有用であった。タイ国内に数多くのポイントがあるので、少々工夫すれば国内用の公衆電話から十分使える。私は、一年間会話の電話は殆ど使わず E-mail で日本と連絡を取っていたが大変便利であった。

2. 学術情報

3つの方法を用いて集めていた。まず、パケット回線を通して香港の Dialog にアクセスする方法。これは、前もって日本の ID でのアクセスを可能にしてくれるよう日本の代理店と香港の Dialog に交渉しておいた。次に、TIAC という学術情報会社を通す方法。これは、チュラロンコン大学の裏にある政府の外部団体の会社である。ここでは、注文した文献を2週間ほどで取り寄せる事ができる。



CEAT (Computer Education Association of Thailand) 設立式での特別講演

前もって手続きすると FAX での注文も扱ってくれる。そして、最後に使った方法が文献 CD-ROM の購入である。タイは国際的に著作権問題があって実際には情報 CD-ROM の輸入が難しいのだが、輸入業者の才覚で買う事ができた。

3. 日常生活情報

短波ラジオはあったが、日本シリーズ以外は聞かなかった。衛星が僻地でも普及しているのでスターテレビで BBC を見ている事が多かった。新聞は地方でも英字新聞がある。バンコックには日本新聞の衛星転送版やテレビ番組の海賊ビデオレンタルがあるが、高いしあまり見なかったのでよくわからない。

4. コンピュータ、パーツ

IBM が中心。国内にはクローンやサードパーティがごろごろしている。廉価品は個々の基板の耐久性がなく、年中分解して修理やボード交換が必要となる。おかげで、組み立てがうまくなった。工作の技術までは必要無いが、ある程度のハードウェアの知識は必要。

秋葉原のような部品街がバンコックにあるが、基本的な TTL を探すのにも苦勞する。ジャンクの多さが目についた。価格は日本より高い。

5. 書籍

洋書はバンコックに 2ヶ所、ある程度置いてある店がある。それ以外は各国立大学の購買部の本屋にもある。コンピュータに関しては着任当時は、マニュアル本ばかりで、理論系の図書が非常に少なかった。しかし、半年過ぎると多くの理論書が並ぶようになった。これには本当に驚いた。

6. 免許、役所

国際免許は 1年で期限が切れるので、途中切り換えが必要となった。大学の先生を通して、陸運局に交渉してもらった。ところが様々な書類を揃えることを要求され、加えて最後に試験を受ける事になった。英語の問題はどこの試験場にもあったが法規は日本とかなり違う。幸い合格したが準備と取得で 1週間かかった。

後に体得したが、知らない役所での交渉は現地の人間を連れてゆくより一人で交渉した方がうまくゆく。窓口で現地語でなく英語で交渉しているとすぐに偉い人間に直接面会できる。

7. インターネット

富山大学が接続されたのが派遣中で私は ID がなかったが、タイの国立大学には導入されていた。登録さえあれば TAIPAK から入れる。国立大学では、交渉すればゲストとして使わせてくれる。一般向け登録は NECTEC が (National Electronics and Computer Technology Center) が扱っているが、外国人まで拡張したかは不明。AT & T がハードウェア通信網を扱っているのでそちらと交渉した方がいいと現地の友人に言われた。しかし、その交渉の前に帰国になってしまった。

8. アマチュア無線

最初に現地の連盟の役員より日本人への臨時コールは発給まで 2年かかると言われた。手続きは、証明書類の英文を日本で揃えて現地の連盟 (4 団体あるが HF の盛んな RAST を選んだ) の会員になった後、そこを通して許可申請する。在任中、人物照会はあったが結局許可はもらえなかった。

現地人は利用者が多い。電話が高価なので代わりに使っている感もある。アンカバも多い。しかし、取締りは非常に厳しい。一般に使えるのは 2mFM だけで、HF は特別で個人運用は簡単にはできない。ポケットは法律規制で使えない。当然 ATV や画像通信もだめ。430MHz は警察や飛行機バンドでアマチュア衛星も使えない。アメリカ人へのコール発給は早いので W コールを取って持つていくと交渉しやすいだろう。

長期の海外援助ではどうしても現地の状況に応じて、内容を修正する必要が出る。いくら日本で考えても準備しても彼らの実態を予測することは容易ではない。むしろ、現地でいかに柔軟に対応できるかが大切である。特に学術分野では、情報が要となる。

「教師を目指すひとのためのコンピュータ講習会」報告

センター専任教官 吉田 雅 巳

実践センターでは、「教師を目指す学部学生」を対象にコンピュータ操作・活用方法の講習会を夜間PM6:00～8:00あるいは、土曜日に実施してきました。この講習会は、1回2時間、3回を1ユニットとしユニットごとに参加者を募集したもので、初級コースに3ユニット、中級コースに2ユニットを設定しました。担当は、私と私の研究室に所属する卒業研究生で、私の海外出張までに計14ユニットを実施しました。

近年の教育学部学生の情報機器に対する興味は高く、また実際に学業で活用できる場面も増えている現状を背景として多数の応募、参加を頂きました。また、この講習会で吉田研究室学生も指導者を担当し、その指導技術の向上、指導-学習過程に関した諸研究の達成も併せて成し遂げる事ができ、眠い中、師学で苦勞した意義があったと感じております。

実践センターでは、この講習会の成果を今後の改善や活動に結び付けるために、参加者のご意見(各ユニット終了時に記入依頼したもの)を当ニュースを通して紹介することとしました。肯定的な評価だけでなく、貴重なご批判も頂いております。これらを率直に受け止め、多様な参加者の要望、既習経験に対応すべく今後とも研究実践に取り組みたく考えております。

教員養成課程 小学校 M・Sさん

ハードウェアは、ワープロしかやったことがなく、コンピュータは興味があったけど、さわったことがなかった。だから講習会の初めから専門用語がいろいろ出てきてわからなくなってしまった。わかりやすい言葉で言い直してもらえたらよかったと思う。とりあえず全く何も知らなかったよりは進歩したのではないかと思う。



講習会風景

また、家で復習ができればいいのだが、家がないので一週間たったら忘れてしまったことが多かった。やはり、こういうものは続けて使わなくてはだめだと思った。

何度も同じことを間違えたりしてインストラクターさんには迷惑かけました。すいません。でも一人に一人のインストラクターがついていてくれたのですごく助かりました。ただ、指示がよくわかりにくい点も少しあったので、後の反応を考えて指示して下

さい。

この講習会を機会に、また何かあればコンピュータにさわってみようと思います。

教員養成課程 中学校 T・Oさん

コンピュータの使い方はほとんど知らなかったので、今回の講習会を受けて「入門の知識は修得したんだろうな」と満足しています。ただ、今回教えていただいた内容が「コンピュータを上手に使えるようになった」という状態を10としたら、一体どの程度なのかわかりませんでした。この先初級・中級…と機会があったら受講させてもらいたいと思っています。

学生の方が先生に代わって指導をされたのですが、正直、大変分かりやすかったです。この後もまたヨロシクお願いします。どうもありがとうございました。

教員研修生 T・Aさん

“MS-DOSとは何ぞや?” “何となく成績処理をロータス1-2-3でやっている(数値を打ち込むだけ)” “ワープロでやっとな文章を作っている” こんな状態の私でそれも今はいろいろな本を手当たり次第に読んでいたところだったので、この講習会に参加して頭の中が整理された気分です。どう

もありがとうございました。

コンピュータに関する教育というか、コンピュータ自身を教えるとなると一つ一つ操作を一斉にやっていくことになるのですが、この講習会内容はやり方の（操作）違い、区別が分かりやすくなっていたり、手順をおって頭の流れがスムーズになるように工夫してあったりと、大変、勉強になりました。コンピュータを利用した授業とコンピュータ自体の学習をうまく組み合わせて効果的な指導を考えたいと思います。

専攻科 T・A さん

僕は、今年この大学に来たのですが、前の大学で昨年卒業論文を作成した時に「一太郎」を使い、ある程度は使いこなせるようにはなっていたと思っていました。が、「MS-DOS」とは何かという理論的なことは何一つ分かっていませんでした。これがこの講習を受講した理由ですが、結果としてこの講習は僕にとって満足の得るものでした。これを機会に中級の講習も受講したいと思うので、その時はまたよろしく願います。

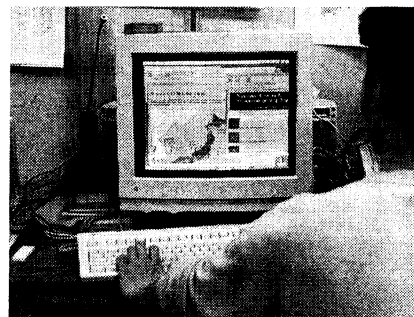
公開講座「教師のためのマルチメディア」

平成6年度の富山大学公開講座として、8月24日から26日までの3日間、当教育実践研究指導センターを会場に、現職教員を対象とした「教師のためのマルチメディア」が実施されました。

本講座は、学校教育へのコンピュータの導入が進む中、その望ましい活用方法に関して考えようと毎年企画されているものであります。特に今年は、急速に普及が進んできているマルチメディアやインターネットなどの話題を中心に、体験的な学習が進められました。

講座の内容は以下の通りです。

- 1) 講義「新しい学力観と今後のコンピュータ利用教育」
山極 隆 教育実践研究指導センター長
- 2) 講義「マルチメディアを活かす教育方法」
山西潤一 教育情報科学 教授
- 3) 講義「マルチメディアによるプレゼンテーション技法」
向後千春 教育情報科学 助教授
- 4) 講義「国際理解教育とマルチメディア」
藤田正春 日本語教育 助教授
- 5) 実習「ハイパーカードでマルチメディアアニメーション」
穴山 彊 技術教育 教授 向後千春 教育情報科学 助教授
- 6) 体験「ハイビジョン映像・・・とやまのマンダラ・・・」 ハイビジョン教材の可能性
山西潤一 教育情報科学 教授



インターネットでマルチメディア
データベースの体験

参加者は小学校、中学校、特殊教育、教育センターなどの先生方15名で、どの先生も学校教育でのコンピュータ利用に関わっておられるとのことで、大変熱心に受講されていました。約4割の先生がこれまでも受講された先生であり、中には今回で3回目の先生もおられました。講座終了後に実施されたアンケートの結果、講座の内容に関して6割の先生が期待通りで満足、4割の先生がやや満足と充実した講座でありました。

以下に自由記述で書いていただいた感想や意見の中から2、3紹介します。

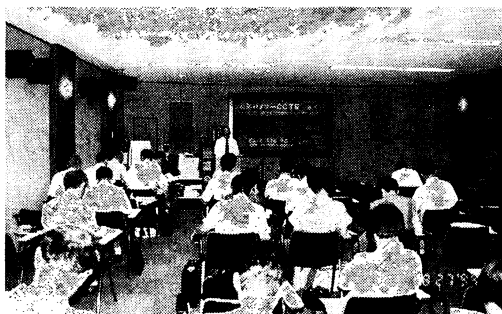
- ・新しい学力観や国際理解と情報教育を結びつけた講義は貴重なもので、他で聞くことができない話

が聞けて良かった。

- ・非常に分かり易い説明でありありがとうございました。一つ一つの内容がとても刺激になり、今後の研究などに参考になり良かったと思います。なかなかこういう機会が持てずに、例えば、マルチメディアや新学力観等、間違った解釈をしている人が多いように思います。少しでも多くの教師がこれからの教育の在り方を考え、子供たちがいきいき学習していけるように努力していきたいものです。今後も、このような講座が続くことを希望します。(文責 山西)

富山県教育工学研究会 特別セミナー開催

8月27日の土曜日、富山県教育文化会館のハイビジョン学習室を会場にして、富山県教育工学研究会、国際電子ネットワーク教育学会主催、教育実践研究指導センター共催、富山県教育委員会後援の特別セミナーが開催されました。本セミナーは「Conference on Computer & Telecommunication in Education '94」でパソコン通信やインターネットの環境基盤整備が進む中、通信ネットワークを使ったこれからの教育について考えていこうという主旨で開催されたものです。



ネットワークの教育議論が
盛り上がったセミナー

プログラムは以下の通りでした。

基調講演 「ネットワーク時代における情報教育」

富山大学教育学部 教授 山西潤一

研究発表

1. 多様なメディアを活かした性教育の試み

福野町立福野小学校 笹島康代

2. シミュレーションを用いた課題解決 —理科と技術科での実践—

砺波市立出町中学校 水木 護

3. 理科学習におけるデータベース活用の試み

小矢部市立蟹谷中学校 鷹西謙成

4. 英語教育におけるパソコン通信の実践

帝塚山学院泉ヶ丘中等高等学校 辻 陽一

ハイビジョン学習体験「立山・黒部」「とやまのマンダラ」

富山県民生涯学習カレッジ 映像センター

招待講演 「パソコン通信を使った富山との交流プロジェクト」

英国北アイルランド教育局 Mr.Brittain, Mr.Brown and Mr.Farrell

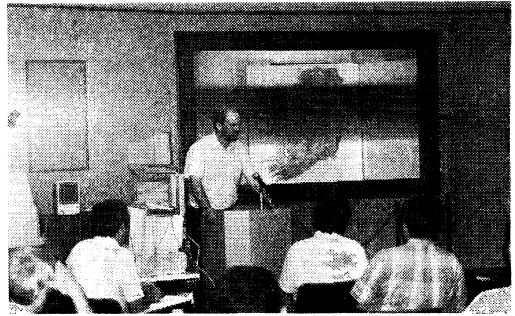
特別講演 「新しい学力観とこれからの情報教育」

富山大学教育学部 教授 山極 隆

当日は県内外から約100名の先生方が参加され、実践発表を中心に熱心な議論が繰り広げられました。

また、英国北アイルランド教育局から行政担当者他3名の先生方が参加され、今後の富山大学や日本のいくつかの学校やヨーロッパ各国との研究教育交流プロジェクトに関する展望などに関して興味ある計画が報告されました。さらに、富山大学教育実践研究指導センター長の山極 隆教授のグローバルなコミュニケーションと教育の可能性に関する大変興味深い講演に参加者一同食い入るように聞き入っていました。

とにかく、情報基盤の整備によって、多数の国内外の先生方や子供たちとの交流が手軽に行えるようになってきている今日、従来の教室という枠組みを越えて、地球規模での教室が構成される可能性があります。このような情報環境の中で、子供たちの豊かな国際性や情報リテラシーを育くむ教育について今後とも多に研究と実践を積み重ねていこうという参加者の意識の高揚で会が閉じられました。(文責 山西)

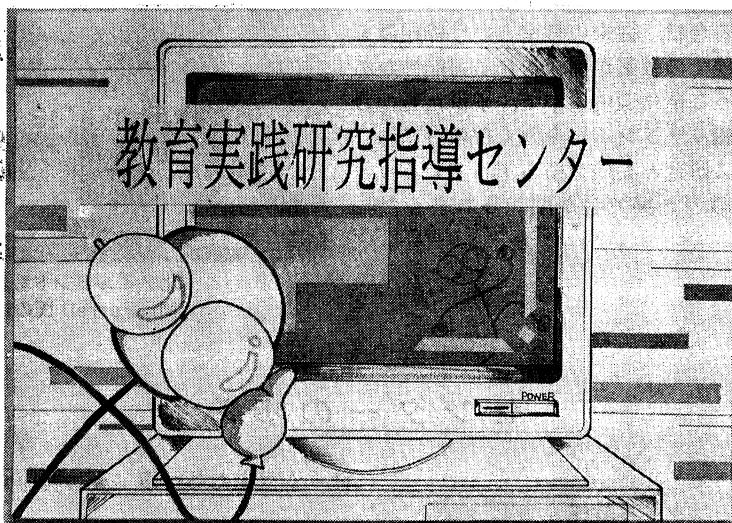


北アイルランド教育局
Mr.Farrell 氏の講演

センターの歩み

注：☆は主たる行事 ★は関連する事業

- | | | |
|-----|--|---|
| 4月 | 山極 隆センター長就任 | |
| 5月 | | ★教育実習協力校決定
★教育実習事前指導(9~10日, 他学部) |
| 6月 | ☆センター運営委員会(21日) | |
| 7月 | ☆センター紀要12号編集委員会(1日) | |
| 8月 | ★富山大学公開講座(24~26日)
(教師のためのマルチメディア)
★Conference on Computer & Telecommunication in Education '94(27日)
★教育実習事前指導(8月31, 9月1日)教育学部 | |
| 9月 | ★教育実習運営協議会(2日)
★教育実習(9月5日~10月7日) | |
| 10月 | ☆センター紀要第12号発行
☆第45回国立大学教育実践研究関連センター協議会(7日, 岐阜)
☆平成6年度中部・近畿地区教員の資質向上連絡協議会(三重県13, 14日) | ★第20回
全日本教育工学研究協議会
全国大会(10月14日, 15日 金沢大学)
★第4回教育工学関連学協会連合
全国大会(10月8~10日 岐阜大学) |
| 11月 | ★平成6年度教大協北陸地区大会
教育実践研究指導部門研究協議会(新潟大)
(17, 18日) | |
| 12月 | | ★教育実習運営協議会(12月13日) |
| 1月 | | ★日本教育工学会「冬の合宿研究会」
(1月28, 29日 山形大学) |
| 2月 | ☆第46回国立大学教育実践研究関連センター協議会
☆平成6年度教員養成大学・学部等教官研究集会
(東京学芸大学)(17日) | |
| 3月 | ☆センター運営委員会
☆平成6年度教員養成大学・学部等教官研究集会
(大阪教育大学)(25日)
☆センターニュース第13号発行 | |



印刷 平成 7 年 4 月 26 日

発行 平成 7 年 4 月 28 日

編集発行 富山大学教育学部

附属教育実践研究指導センター

代表者 山 極 隆

〒930 富山市五福3190

(TEL)0764-41-1271

内 線 2540